



特別
14
600
25



雨總里見八大傳第九轉卷之十五

東都曲亭主人編次

主忠諫入の志子代

第百五十九回

信隆被變旗兵を借る

却説雜兵狼狽。早晚明哥の降ばかり来て軍師大敗を野に獲る。
那時已有二處在。曉來未有。相合の間謀見天盛餅九事と金牛
寺の其火鎧も歸れ。交勝の汲引きせんと同日。五十
の敵を殺し。勝て。先鋒も。と。具合は。毛利。信隆をも笑
れて。現れる。角。狼狽。まよむける。飛矢計の折。も。り。て。浦島をも飛
助。さう。實。物。の。車。食。事。皆。の。拵。そ。ひ。生。下。村。あ。と。つ。を。銷
め。の。う。知。も。難。を。賣。錢。を。取。る。猪。金。紙。じ。變。て。己。今。守。屋。へ。出。

は。この時高田夜叉の一人定ては毛雲の本陣に赴ひて義城主
鬼子もめり。義城の主の程帳中を爐火の下に兵書を圖る在室が見
え。又て對面坐して田下毛雲が今宵自便連兵百五十名を捉え。大刀を左
側の使と共に一馬太刀。走り出で車の速く東峰上群にて難耶。貝六を和琴を
五六古陽聲を奏せ。敗故より方を轉じて又船首を取て。而して身を伏せし
前發の別駆を下りて二度も上十人へ歎きを打拂。眞理也。唐守牛助
を助拂。帮助者を又入森兵八。粗同猿八。猿隼を加え。尾添の自津定天
を加え。轟金丸。身に銃牛の事の便宜を備地より告白。手に三の墨を以て之を
號を加へ。四個の囲碁をそ。前後二度よ畫り。人馬を追む。塵を起す。其
れ等の御射技本數を計らへば大刀を主。軍事を主とし。千代丸を主。後
陣を主。箭を主とする。而して之を評するが。鳥夷の役を以て之を主とす。

溫集
印向房

成主程よりとて、鎌倉より冬の夜深く、語分兩頭あり。十一月五十五日、
今朝早天より赤畠百中が舟節と船櫓を賜りて、貌枯草車器へと
の事。よしとて、不思議も、てぐれ。是れ後定正頭定相計ひ。則水陸の隊取す。ここ
に連れて歸る。則水陸の隊取す。道里予す亦同葉脱
來。軍兵大隊毛利清看防禦佈へ大山連第忠實ひ。相従ふ。是を守る。
其隊一萬二千をうべ。又能下總國小臺を根據す。之處
駕子里見翁者矣。通。根大罪。外官矢所河を前す。防禦布使。大場
武者助直え。是を守る。又其外の軍兵一萬を守る。又不
信。大鶴現八幡道を貯そ。日。又不
神。かね方済使。大川。甚済介義。大田。文吉。時順。太清。鷗。矢所の下流
行徳。又は河。陣。其隊。軍兵七八千。又は。もと守る。上流。四

卷之三

十八箇城の故の如く城主頼人是を守り、海に備え國とど稻村の
城の義成の二駆が更見たる者、薦川の庫財階はうに二千士卒と
御上衣を守る畠田の城へ長成成丈里見治部太輔義定安織田亮壹
村木百介氏え塙内藏人與之了相程よと是を守る龍城の士卒僕
一二千見るべと云題よ。うちノ川崎へ向へ水戸の浪八將八管
理次支定正並み冠正の長男次第少輔少輔朝參小幡木工頭筋
左衛門尉富恩保儀武田左京亮信隆是を宗鏡の大浦トテの際の軍
兵三千萬騎名巨艦數百艘をも有する。本月八日の既て天より行ふ四ヶ
日寄さんよも又下總みち國府吉三へり官領山内鷹狩太輔顎足足利左
右衛門相原氏と一門大将をも更にあらわす上林五郎全吉左方を至り白石
城介宣勝村兵の家臣櫻坂史子村新義帆大手入素をも號して居候。

之源氏五王
間の軍兵二千八百又行徳へ生を正の娘子上林五郎丸朝ニ良ヒ千吉介
自ら一両大將大石石見守室原橋慶介清久相馬
虎ハ久慈ト
母同母常瑞石津年中是より是より程々西原の軍士二萬兵
諸方の隊伍をりかくとて安らぎれども御領之大東北朝ノ自門
よし高キアミ成川西園河より行徳を成氏を有大内
士卒の體ト鍛れん心事もつゝもヨリアリテテガモト成氏を有大内
徳ノ末より言葉の口庭正義とひ名前待奉してモ次ノ如クの體大
御事なまてもあざれが獨情而シ臨江ノ體ヨリ人の手に取れひと車の手を反てたる神ど重本木取
うち筋を、筋地より主を、寛解るやう情情に愁ひ下りて車の手が
ある。那處意氣と御體りけよ定王より是より御體

ある。あくねがの近所
諸侯を會そむか其の後も、失へども、莫大な功
徳を盡さむ。遂に國府の臺へ寄駆され、他處不登る。禮士大夫を敬
まむは、頗る自誇する。一日、水
總の守居を立たせしも四十餘城の領地を下總より改め、
上總を置き、其軍勢を五倍の本軍三十倍の兵六種に委嘱。
脚手より入るゝ何の御教訓ひれり大功の細君を有す。太宰ノ小妻

主事と早、興安と白井將軍。丁日未時、安昌の重臣を率いて黒旗僧正四教の上
齋に安宿。六時、一丈四十餘步城内を出、高地に於て下總守を攻め、是
上總守田名を殺す。其軍功主正主の本隊は十倍、兵六千、權兵七千を殺。
脚馬ひよをもつ何の歎聲。鞍ひよて大功、細君を殺す。太郎八千を殺
又。今一參事所忍の入臣を従て而く、軍を討ひて之を殺す。是を
嘉定と呼ぶ。利少成氏、陽子、晴虎と解る。又阿多守と。顯政と云ふ。是を
國府と號して、縣令を發する。復能と云ふ。主へて有侍一程、肩書の内
廢帝在位實入道、通達。其子主六、麻月友を名代帝す。又曰主
十子の孫、晋野主は。聯友隊兵へ三百騎を昨日相撲の體合、

驅
夾
柳
枝

卷之三

是則是顯宗主と。九條長政。又は秀吉。さへ主とす。とて。是を與く
之に。復より見を廢す。而も。是の前。まことに。背を委す。而も。首不
軽か。今。其の體。の如き。事。よ。主。う。反て。是が。主。大金方。と。を。有り
む。や。又。是。ひ。利。く。が。是。ち。忍。そ。里。見。民。よ。往。じ。ま。の。三。年。と。寄。方。の。諸。
船。離。て。地。を。別。ら。り。う。ひ。よ。と。ん。り。出。お。や。
今。大。寒。の。時。復。多。木。戦。と。上。手。と。ま。る。主。年の。ひ。勝。軍。と。様。に。自。由。う。べ。し。
日。昔。ハ。近。世。も。安。房。の。上。總。を。攻。伐。と。て。船。渡。ア。例。と。す。も。本。行。ハ
る。ウ。カ。ウ。ア。リ。而。更。路。使。わ。れ。も。船。と。山。藏。ヨ。モ。て。攻。撃。暴。れ。け。れ。が。船。寄。モ。ぞ。而。不。極。之。
轟。し。船。が。海。暴。れ。ア。威。長。つ。木。戦。不。主。自由。を。望。ム。不。知。矣。家。内。う。士。年。と。
駆。テ。之。遊。宣。ハ。水。戦。の。時。モ。無。也。知。られ。ぬ。と。雖。の。軍。と。る。ま。の。之。
國。興。定。主。ハ。之。若。を。知。き。る。然。則。と。但。少。水。路。向。か。其。保。配。ノ。不。

のをひのち
の道を反て國廟宮室の廢み向ひのひが是莫研者と長と號す日成敗を以
てくろまをせしめうを精磨れと玉席を柏ち面を冠して親一介も無
事の後立見諱事無事有りと定正へゆくも無事を譽め面より朱を淡く
眼を瞬り膚奇きとされ助支過吉と親道灌の功説とれども口一
向の時仰りて、竊也美大國事と自家と謂ふ形を志取とよて名里見
通曾我身致す。大山本道馬犬等皆乃れを引人、隣國は毒、宿セ
る。罪軽あひて今
同をもう送り奉る事の無事りて、今兼都助と賣名を猶疑ひ其も
准ら況や今す寛大天へりて、其利と雖も木根也か根根本也。
橋村の城を被ん野見の寺跡も、かくの如故、かくの如故、かくの如故、
てあつて脚冷き朝にかくの如故、かくの如故、かくの如故、



是の間、御師の御道を心保ひた體、
詔を書せらるゝ處とれども、大不敬其罪、重ねを知る事無通薩
つ重く特徴候をちゆう。得て、又扇をも、
手をも、駆る。さて、
手をもとす。不意に外風にて扇持の体を今いも第へ見取る。
と、扇を手前各々扇氣を。右は、幻術賣の裏敷る所也。
あふるも手前、耳を賣る日と照り、扇持を云ひ、此が御
御使の一ひとひべぬ。日から、遅暮を外せし。且て、今參るも尚早う。親
通じて、教えられ。敗軍に折衝危殆と拯ひまへ爲ふと、ソシモ黒
正り。更に、圍ひ候。蜀と取て起一。つまむと、君臣上下の亂を爲す。
白騎命根断て、衣冠四馬り、佩刀の上、引抜きもん。天の帝子
なる。武田信隆、其代へて叶壁。まことに身を崩す。樹齋の如きは、

のまえ。のまえ。
集子詔諭下りて、在下の信重の名代もす。是れ等の罪より免められん。其の狀を以て、
爲めの罰を以て罪を勘解説す。而して、奇兵の税は解免し。且今時まで、
懷き難い事無る。是れ年間も、神祇に貢貢を賜へべし。是れ、其罪是
事も他に、算算する所入道の年間も、軍功も、一世人の者等も、
一個の敵を殺せば、必ず有功の嘉賞を蒙る。是れ、
縣政の悪くも、よしと。と、謂ふ諺の詞を主張せむ。左近は、大石憲
信及箕田源十郎也。諺を深く思ふ。

走正健士先を疊りて改め
發児子甚だ喜ぶ。重厚聲にて、
と聲ひきて歎美す。嘗て、
我太皇曰く、越後守あり。寧皮膚若き者と云ふ。則
耳。耳を以て。身を以て。三百石と謂ふ。唐の

金谷へ廻り、秋成が「お
中逐」告げ是を知る者多也。然
正の名望と寛容て助多豪傑也。是
當田左京亮信隆は素是上卿也。
麿南の城、越人初信産復了那基。田主藤上酒大市處遊の女姫と結び。水
天ノ島也。是も加里見主也。トアリ。送れて立木館山。江戸に歸
時、信隆は亦久丈連の罪免。又と貪じて、良枝も有里・信昭
千代也。四百石也。只のみ名主也。城も。折隣の大内城。貞め在と道
元堤内自往也。と戰程も。直里・父信昭が心慶りして寄跡よ。之を
其戰後生相も。信隆は早く命を免れ。野
家も。宿地も。唐の城も。起なく貞作昌・貞良・貞景の兄弟も
幾々。在下貴官も。主傳富翁も。あまのと。十一月。高麗より。内二年。西

喪時齋

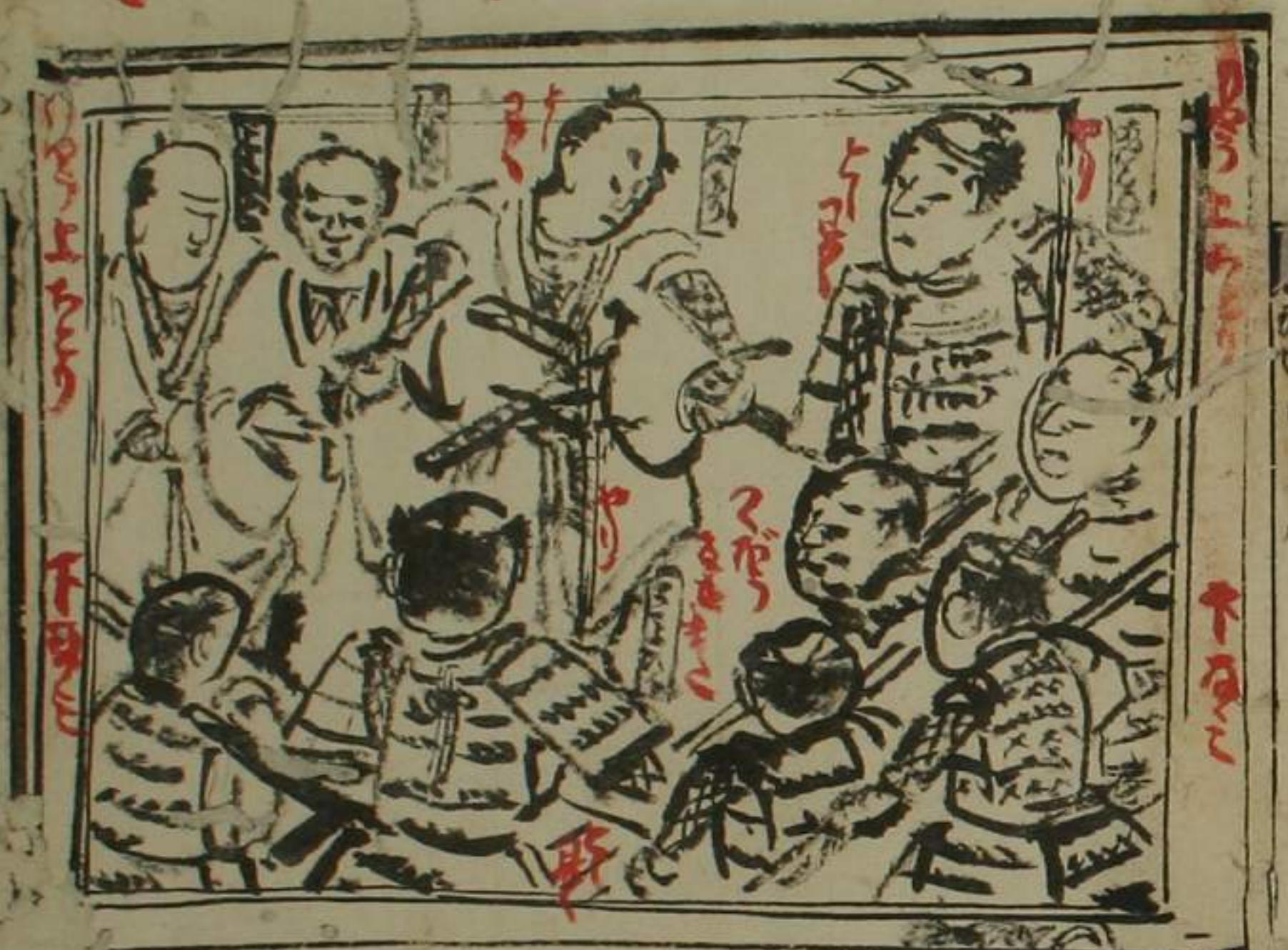
味

胸の機用善惡邪正孰知。鬼神もまた日量と云ふ。
第百六十四 無事士相挑む 両隣の勢力

名許客を内應の質

胸の機夙喜惡邪正孰知。鬼神も是と量らむべし。
第百六十回 無事衛士相挑ひ兩
年許を内應の質
余程は定正が五十日未だ近江濱良遠より多く戰艦を集め大石宣義奉りて其船を展換を為す大森六郷まゝ海岸より羅ぐ大小の戰艦千百數十艘。内中駆使十艘。小柴木焰硝の類都て燃草と云ふ殊に、憲儀家臣仁田山晋六武丸是を率ひて天狗と號て柴と云ふ。富時紫の舟人。冬十月の初より日暮の草合。主に海共河と旅々生活す。其のうち海合を保ちる。改壽至如より十日。同水車と云ふ。柴と連する。等の車を指せば汎用と云ふ。日暮より三日柴車を旅立度。且度不動。其の外に若産と云ふ氣味在り。假他有。海合の及ぶ所ある。遠海をとける。

卷之三



故主豊後を報す裏代の准備といふが、我へ徑々止むて果てて、座寄
らるる所と直示せし。友勝は准備とぞうり玉に集まつて、宿下仁
川宿を下く。山野六、一旦巣谷より反馬二面刀を奉り、遂に友勝の文書
持つて、ひじよの口めにて、單節の目をほら見ゆる。却て豪儀と舞
謝り且歎たと餅九席を、別を告ぐて退ひく。船中も棄て、舟房で役をもつて余程の大る宝物、後へ天正五年、織田家繁云謝り、半弓のわ山
ひくて、家まとて、草創呼す。三個の殿をすそを开き、檻又准立ちて、御と五ますの織
かづまつ隨即、主君定正は千代丸、豊後の裏代の謀載を呈聞し、且是事
事の方へ遣へる。同譯男天正、餅九席が便して年三十、豊後、宗鏡院
蘇萬助と老弱四個の手てにて顛末を語り、主上へ正へ縣等を附す。
期計を以て、教い、想を乞ひ、おもてをされ、首寝を拂ふ。憲使屋

かのうら どうもひる あい みよ おほさん いわく
さひめづん那風外道人りを送る。安房の方で見山も別寄の懸念より、黒氣
か。かくとて那里の内に居るやうとらひ先見果て、吾輩今將も。代
た。圖書助官宣室が内席の吉草あり。又赤穂吉草武田信隆傳
て曾れ是自家の門宿にて車の種代必勝必利何の變ひあるべし。併
ち吾山能郎叫むとて、シテ字無城保實は菊置が開を矣。田原庵
ト。吾山。是の下をかへり。詞をうそ詠歌を重ねて歌然う寛
二ふ管せん。是の下をかへり。詞をうそ詠歌を重ねて歌然う寛
樂山を義教の御詠歌。是回のま北第一義ハ風外之道人合戦祭
ハ八月。谷山を起す。是く八月。圖戰の折失東。モカ草を
多き。かくとて馬上とて又智者。かくとて車の取向ニシテ
かくとて馬上とて又智者。相うちろ候てふと候へ。猶マ勝敗却皆日與爾
の下知を發す。俱とて、

眼
勤
懲
觀

スル。此の皆が廻る。千代は、保篤を。夜の事、
志の具番卒の頭人。不運を。母技太郎と天道解九郎を。和
氣も。由西京に。心島て。よく諭す。取巻二説と集めて。則併て。三
元。嘉淨。一室。本多。次第。許す。枝太郎と。説九郎。
勇勲番の頭人。五十六個の難を。從ふ。後。四十
水。往。魚も。雌雄の。獵。合。其の。あく。日。新。九郎と。枝太郎。四十
至。まじ。而。猶。復。す。事。良。ハ。軍。幕。が。年。少。且。度。を。元。面。見。裏。裏。
使。野の。若。の。目。と。歸。く。木酒。人。と。聞。と。お。地。え。と。堪。と。備。人の
久。舞。原。の。傳。地。枝太郎。と。圓。量。す。我。富。那。叫。ハ。半。代。久。暮。如
一。便。縣。馬。助。の。女。年。や。い。ま。一。月。入。今。と。外。是。め。と。萬。年。增。サ。心。解
臥。向。人。か。日。三。月。戰。勝。ト。勝。陣。殘。兵。と。不。無。

早。參。象。

左。九。の。ね。右。八。左。甲。も。も。八。船。不。然。左。底。意。か。即。殺。も。思。我。亦。宣。符。得。久。八
や。れ。あ。つ。が。相。ひ。い。で。今。新。の。國。公。見。十。時。す。而。即。同。主。相。公。名。ま。
う。の。舉。す。内。ど。勝。軍。の。役。る。と。と。宣。す。と。と。も。と。勇。り。に。き。
か。敵。と。ま。守。る。の。こ。東。食。香。と。金。哈。圓。餅。と。見。る。飯。と。忍。す。黒。
青。ら。れ。と。先。那。戸。山。と。告。て。櫛。ぬ。と。笑。て。發。す。と。宣。す。と。時。公。見。慶。と
情。華。が。彼。太。郎。と。笑。向。て。延。の。頭。と。假。を。買。せ。う。急。に。と。安。す。
さ。の。頭。と。急。に。と。安。す。と。と。また。我。と。用。聲。の。發。す。と。將。且。上。不。
我。首。禰。と。方。と。起。加。と。一。旦。捕。捕。ら。れ。と。私。と。か。私。と。
見。殿。の。操。と。那。壁。の。壁。室。と。交。郎。と。報。宣。す。と。小。功。あ。名。算。半。
半。と。私。と。那。壁。一。個。と。と。私。と。私。と。と。私。と。私。と。私。と。私。と。私。と。

済之不曉。日明。岐。里。日。陣。所。實。當。爲。隊。長。其。頭。浦。巡。致。兩。個。小。直。騎。印。東。六。明。相。謀。立。軍。兵。黃。川。太。郎。二。郎。酒。交。情。墜。之。國。飛。心。児。捕。本。陣。入。奪。主。將。敵。向。ア。臣。方。堂。氣。浦。續。馬。原。上。三。遠。二。個。飛。心。鬼。生。拘。乘。歷。主。三。直。向。ヒ。よ。他。う。素。藤。同。兵。主。墨。羣。驥。當。城。取。底。金。使。軍。陣。參。主。者。國。足。よ。義。成。立。端。也。生。其。生。拘。を。突。捕。あ。財。年。大。阪。毛。野。夫。千。り。其。主。處。法。而。同。大。山。道。有。明。相。竹。家。長。み。ん。集。主。證。與。之。然。も。生。拘。二。名。の。解。の。主。信。陰。福。子。一。條。端。四。萬。官。有。主。密。傳。一個。の。社。交。も。山。者。見。了。

とえよし可ち全番信隆、密使をもとと推て御陣へ參り、喧嘩九
別島をもと、墨聚や、信隆譲らを、田主後と、難一をもと、元日、羅服
を、路きの難を御敵とす。ち脇くも勢大船を、一二の旗の黒船、
るる見らば、まよひ、かわら。おこなは、おこなは、武田信昌の義旗を、
乱戦申玉命を免れ、甲斐國へおどる。國守、武田信昌の義旗を、
身を、富々、今まや那屋へ、おどる。信昌へおおむに軍兵を、確
保す。信隆是時、そひく。諸々、信昌の代軍、うそて、大功を、
よろと、鎧と、駕と、五十三城を、到り。其妻陽子、越後守、提軍之外
の夫の、先非を、勧め。當家の、家業、と、墨聚の、難を、既に、いざ、奮
起され、思教から、墨聚の、難を、解く。信隆が、もと、大功を、奏す。
其妻、其子の、於て、難を、解く。難の、城を、取り、駕分、皆願ひ
、信隆が、名を、あらわす。即ち、墨聚の、難を、解く。異なりの證文を、解き、も

三日、候のたる、候は、一條、集有、ご保、皆、もと、名指、下り、おと、信
山、五十三の城を、下りて、前路を、情地、不可、よ、使を、謀せ
し。信隆、墨聚、へ、和て、骨、衣襟、裏、お、あ、合、す、と、商、共、相思、
めぐらし、義成、駆、そら、發。駆、明、不、諱。と、其、信隆、墨聚、合、
おもむき、毛野、と、護、せ、ゆき、す。其丈、今、信、有、り、趣と、聊、り、量、は
ある。尾、小、數、行、と、上、り、人、を、希、と、想、む。其、是、墨聚、
素、蘿、上、り、人、を、希、と、想、む。其、是、墨聚、見、義、根、本、偶、え、ば、勝、
一、知、れ、ま、一、星、通、徒、と、寒、や、と、今、り、待、く、思、す。か、と、
寄、ま、東、山、歌、を、移、り、う。何、麼、許、え、只、許、え、只、終、吉、直、
譲、ま、利、と、通、御、難、御、譲、び、此、義、根、本、偶、也。而、御、か、へ、も、翁、の

の人の心ならぬ。故に保質と書く。敵を謀る者同是也。故に
其の武田秀吉利害をもどかず。智謀の老官事は多。わが開拓臣
はまきあらへ傳聞する。嘗て。わが懸念信隆は、保質より多く
の裏諭をうけ、恩免の御件をうけた。詔令を義成もす。毛野の兵旨を向
ひて然ば、通常が小山の三里五尋、徳音西かたの危きをひき、西主俊
今信隆の歸服の願ひを察づ。許さる。おお、街に吹き、間もなく度々
奉教寺よりいに筆今子松の御書目を賜り。信隆は、歸服の意地を
諦めず。かく扇翁士紳、那良を惜らざる。御言をうながす。かく信隆は、遂に
見廻を下す。又、同の計りにて、之を承り、御方より是を。使し御坐りた
まふ。信有をひき保質より、御内侍の足利信隆の意を裏書きをもつて、
高木の御内侍の足利直義と、信有を謀叛のものと成逐る御譲り付を則
被書を附す。取て、近い御澤の信有を、井村清澄と預けた。

天保十二年
夏五月二十一日獨

若依堂主集

筆
福
壽
市
大
吉
利